

社会的リアリティとしての「理解」と「誤解」

—いかにして人はコミュニケーションにおいて「理解／誤解」するのか—¹⁾

遠藤 英樹

はじめに

- I. コードの共有の不確実性
- II. 「理解」と「誤解」の同型性
- III. エスノメソドロジーについて
- IV. いかにして人は「理解／誤解」するのか？

おわりに

はじめに

私たちは、日常的に何気なく「君のことを理解しているよ」とか「君のことを誤解していたよ」という言葉を、人に投げかけたり投げかけられたりしている。では私たちは、いかにしてコミュニケーションにおいて、人を「理解」したり「誤解」したりしているのだろうか。

一般に私たちは、気持ちを伝え合うことでお互いを「理解」し、気持ちがすれ違うことでお互いを「誤解」していると考えているが、本当にそうなのだろうか。お互いの気持ちを正確に伝えるべく努めさえすれば、「誤解」は解消され、いつか相互の「理解」が生まれるのだろうか。だが、あるがままの心で気持ちを伝えようとすればするほど、時として「誤解」が深まるという経験を誰もが持っているのではないか。

以上の問題を含めて、本稿では「理解」と「誤解」を考察している。

その際まず、コミュニケーションを行っている当事者たちが、お互いの気持ちを伝え合っているかどうかは、どこまでいっても確認できないことを示す。次に、その点では、「理解」も「誤解」も同型であるということについて述べる。そして最後に、「理解」と「誤解」が同

型であるにもかかわらず、私たちはいかにして、この2つを区別して人を「理解」したり「誤解」したりできるのかについて検討していくことにする。

I. コードの共有の不確実性

常識的に私たちは、コミュニケーションにおいて気持ちを伝え合うことで「理解」し、気持ちがすれ違うことで「誤解」すると考えている。しかしながら、本当にそうなのだろうか。コミュニケーションを行っている当事者たちにとって、お互いの気持ちを伝え合っているかどうかは、どこまでいっても確認できないのではないか。

このことを考えるにあたって、ここではまず、シャノン (C.E. Shannon) の「コミュニケーション」モデルに関する検討から始めようと思う。というのは、コミュニケーションについての常識的な了解を集約的に表現しているのが、シャノンの「コミュニケーション」モデルだからである。

シャノンのモデルは、図1のようなものである(図1)。

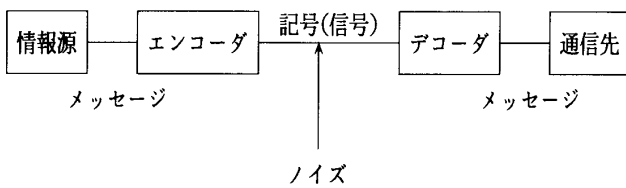


図1 シャノンの「コミュニケーション」モデル
資料出典：大澤（1994）：278

このモデルによれば、コミュニケーションとは、情報源において創始されたメッセージが、通信先において再現されるまでの過程と考えられている。メッセージは、情報源において、特定の記号（信号）の内に書き込まれ、その記号（信号）の形態で伝達路を通してデコーダに到達し、そこで記号（信号）からメッセージに復元される。

この「コミュニケーション」モデルは、機械から機械への伝達に関しても、また人間から人間への伝達に関しても妥当するような一般的構造を抽象したものであるとされている。例えば、人間間のコミュニケーションの場合は、「発話者の心的世界」が情報源となり、そこで思考内容などの心的内容が音声言語の内に書き込まれ、空気を伝達路として受話者に到達し、次いで「受話者の心的世界」の内部で、言語が解読されて「発話者の心的世界」のある要素が復元されると考えられている（大澤1994：278）。

そのためシャノンのモデルは、人間間のコミュニケーションに関する研究にも大きな影響を与えてきたのである（Rogers1986=1992：92-103）。しかしながら、このモデルを人間間の「コミュニケーション」に応用することには、無理があるのではないだろうか²⁾。

もし人間間のコミュニケーションが、シャノンのモデルのようなのだとすれば、コミュニケーションを成立させる重大な条件は、「コードの共有」ということになるだろう。つまり、ある言語が、発話者においても受話者においても「同じ心的世界」を意味しているということを前提としている。

しかしながら、自己の「心的世界」を表現しているある言葉（記号あるいは信号）が、他者においても、同じ「心的世界」を表現しているとは限らない。すなわち「心的世界」と「言葉（記号あるいは信号）」を結びつけている「コード」が、自己と他者の双

方において共有されているとは限らないのである。

私たちの用いる「コード」は、それぞれの「心」の内部におけるものとしてしか存在していないのであって、自己と他者の双方において「コード」が共有されているということは、コミュニケーションを行っている当事者と純粋な意味で関わりを持たない、超越的な「第三者」によってでしか判定されることはない（西垣1991:110-112、大澤1994:279-282）。だが、超越的な「第三者」というものは、どこにも存在しない。

それゆえ、自己と他者の双方で「コード」が共有されているかどうかということは不確実なのである。とするならば、私たちが言葉を発した時に、その言葉でお互いが意味内容を伝達し合えていると思ったとしても、実際のところ、それは全く異なる意味内容なのかもしれないのだ。したがってお互いが気持ちを伝え合えているか否かは、どこまでいっても確認しえないのである。

そうであるならば、私たちが「理解」と呼んでいるものが、ある言葉でお互いの気持ちを伝え合えている事態を指すわけではなく、他方また「誤解」と呼んでいるものが、気持ちがすれ違っている事態を指すわけではないことが分かるであろう。

そうではなくむしろ、「理解」と「誤解」は本来的に同型性を有していると考えた方が自然ではないだろうか。次には、このことについて検討してみよう。

II. 「理解」と「誤解」の同型性

ここでは、先の論述を受けて、「理解」と「誤解」の同型性に関して検討をくわえていくことにする。

その際、以下では、アルフレッド・シュッツ（Alfred Schütz）の議論に大きく依拠することになるだろう。というのは、シュッツは現象学的社会学の観点から「他者理解」に関する議論を展開しており、その議論に依拠することで、「理解」と「誤解」の同型性を浮き彫りにできると思われるからである。

それではシュッツは、他者を「理解」することを、どのように考えていたのだろうか。まず、このことについて見てみたい。

シュッツによれば、「すべての純粋な他者理解は理解する者の自己解釈作用の上に基礎づけられている」（Schütz 1932=1992：154）とされ、「自

己解釈には私自身の持続が連続的にかつ完全に前もって与えられているのに対して、他者理解には他者の持続が非連続的に分節されているために決して完全には前もって与えられず、もっぱら『解釈のパースペクティブ』においてのみ与えられる」とされている (Schüz 1932=1992 : 146)。

すなわちシュッツによれば、他者を理解するということは、自分自身の「解釈のパースペクティブ」を基礎にする以外にはあり得ないとされているのだ。この「解釈のパースペクティブ」という概念が、「理解」と「誤解」の同型性を明らかにする上で鍵になるだろう。

そこで、シュッツの言う「解釈のパースペクティブ」が何を意味するものであるのか、その定義を考えてみよう。シュッツの言う「解釈のパースペクティブ」とは、シブタニ (T. Shibutani) の表現を借りて、「世界に関する秩序づけられた見方であり、さまざまな対象、出来事、人間性の属性に関する一定の見方」なのだと定義することができる。「そういった秩序づけられたパースペクティブを持つことによって人々は、つねに変化する世界を、相対的に安定し、秩序づけられ、予測可能なものとして知覚することができるようになる」のである (Shibutani 1976 : 564)。

つまり「解釈のパースペクティブ」とは、人それぞれの「ものの見方」なのであり、「解釈の枠組み」のことと言える。こうした「ものの見方」や「解釈の枠組み」を有するがゆえに、我々は、自分の目の前のものに対して「意味」を見いだすのではないだろうか。

もし、そうした「パースペクティブ」を持っていないければ、我々は、目の前のものを自己と関わる経験の中に組み込めないだろう。それは、他者に対しても同様である。もし、そうした「パースペクティブ」を持っていないければ、我々はコミュニケーションという行為において、目の前の他者を自分自身と関わらせることはできないであろう。

このように、シュッツによれば、他者を「理解」という行為は、他者を「どのように見るか」、「どのように解釈するか」といった自分自身の「解釈のパースペクティブ」によるとされている。このような「解釈のパースペクティブ」は、人それぞれの生きてきた経験の中で育まれるがゆえに、他者理解の仕方は「解釈のパースペクティブ」の

背後にある、それぞれの生きてきた経験によって異なるものとなる。

このように、他者を「理解」することが、自己の「解釈のパースペクティブ」を通じてでしかありえないのだとすれば、それは結局、自己を介して見た他者像にすぎず、コミュニケーションにおいて、他者がどのように考えているのかといった他者の「心」の中のことについては、他者その人自身しか知りえず、自己は知りえていないということになる。この点に関して、シュッツは「他者の心を対象とする認識は原則的にいつて常に疑わしく、自己の体験に向けられる内在的認識作用の原則的な明白さとは対照をなしている」 (Schüz 1932=1992 : 146) と述べている。

あるいは、それは次のようにも表現されている。「それ故『思念された意味』とは基本的に主観的なものであり、原則的にいつて体験者による自己解釈に結びついているものなのである。それは個人の意識の流れのなかでもっぱら構成されるのみであるから、汝には本来接近できないものなのである」 (Schüz 1932=1992 : 138)。

このように、他者を「理解」することが、自己の「解釈のパースペクティブ」を通じてでしかありえない以上、それは、他者の「心的世界 (シュッツの表現を借りれば「思念された意味」) が伝達されたものとは言えないだろう。すなわち、自己によって「他者の体験に付与される意味は、意識のなかで他我が自己解釈の過程を通して構成する思念された意味ではありえない」 (Schüz 1932=1992 : 138) ののである。

このように考えてくれば、他者を「理解」とは結局、他者を「自分なりに」解釈することにほかならないことが分かるだろう。その点では、「誤解」もまた変わるところはない。「誤解」もまた、他者を「自分なりに」解釈することなのではないだろうか。

そうであるならば「誤解」は、「理解」の反対の極にあるものではなく、「理解」と同じ地平に属するものと言えるだろう。その意味において、「理解」と「誤解」は同型性を有していると言える。

以上述べてきたように、自己のもとに他者の「心的世界」の内容が伝達されているかどうか不

確実であるといった点においては、「理解」も「誤解」も同じであり、そういう意味で両者は同型性を有していると言える。

とは言え、人々は「君のことを理解しているよ」とか「君のことを誤解していたよ」というように、「理解」と「誤解」という言葉を区別して運用しているのも事実である。では人々はどのようにして、この両者を区別しているのか。これを明らかにすることが、本稿の目的なのである。

つまり本稿の目的は、「理解」と「誤解」の同型性を指摘することそのものにあるのではなく、**<本来的に同型であるにもかかわらず、人々はどのような方法を用いて、「理解」と「誤解」を区別しているのか>**、という問題を考察することにある。

そこで以下では、このことについて考察しようと思うが、その際、筆者はエスノメソドロジーの概念装置を用いながら、論述を展開してみたいと思う。

というのも、以上の問題意識はエスノメソドロジー特有の問題意識とかなりの程度、重なり合っていると考えられ、そのためエスノメソドロジーの概念装置を用いることで、筆者自身の問題意識を追求していけると思われるからである。

Ⅲ. エスノメソドロジーについて

そこで以下では、まずエスノメソドロジーとは何かについて述べ、次に本稿が用いるエスノメソドロジーの概念装置についての概略を行っておくことにしよう。

1. エスノメソドロジーとは何か

エスノメソドロジーとは、1960年代以降、アメリカにおいてハロルド・ガーフィンケル (Harold Garfinkel)、ハーヴェイ・サックス (Harvey Sacks)、ローレンス・ウィーダー (D. Laurence Wieder)、アーロン・シクレル (Aaron V. Cicourel) たちが展開してきた社会学の研究スタイルを総称したものである^{3)・4)}。

このエスノメソドロジーが問題としているのは、私たち社会の成員が日常生活のなかで日々の何気ない行為を成し遂げるために、どのような方法を用いるのかを研究すること、つまり私たち社会の成員の (エスノ)、日常生活の方法に関する研究

(メソドロジー) である。

私たちは日常生活において、物事の多くをありのままに、実際に現れるがまま、何の疑念もなく受け入れている。私たちをとりまく日常生活のそれぞれの側面は、私たちにとって、まさに自然に、自明なものとして受け取られている。

しかしながら、これら日常生活のそれぞれの側面が自明なものとして受け取られているのは、私たち自身が自明なものとして、それらを構築しているからなのではないだろうか。つまり日常生活の自明性とは、私たち自身の手によって日々、不断に構築されている「社会的リアリティ」なのである。

エスノメソドロジーは、このような視点に立って、私たち自身が「社会的リアリティ」をいかにして構築しているのか、その方法を明るみに出し、そのことによって、いかにして私たち自身が日々の生活のいとなみの中で社会を創り上げているのかを考察しようとしているのである。

2. 「インデックス性」と「リフレキシヴィティ」

日々いかにして「社会的リアリティ」が、私たち自身の手によって構築されているのか。このことをエスノメソドロジーは問題としているがゆえに、日々の何気ない言いまわしや振る舞いに着目する。

エスノメソドロジーが「会話データ」を重要視するのは、このためである。エスノメソドロジーは会話の中から、何気ない言いまわしや表情さらには、しぐさや息づかいを取り出し、それを手掛かりとして、どのように日常生活のそれぞれの側面が自明なものとして構築されているのかを浮き彫りにするのである。

このような分析手法において重要なのが、「インデックス性」と「リフレキシヴィティ」という概念である。本稿も、人々がいかにして「理解／誤解」するのかを考察する目的から、この2つの概念を用いるつもりである。そこで以下で、それぞれについて概略しておくことにしたい。

1) 「インデックス性 indexicality」

「インデックス性」とは、あるコンテクストが与えられるまでは、会話で交わされる言葉の意味は決まらないという、その多義性のことを言う。例えば、次のような会話を見てもらいたい。これは、シュルツ (C.M.Schurz) のマンガ『ピーナッ

ツ』(日本では『スヌーピーとチャーリー・ブラウン』という名前で見られている)から採ってきたものである(図2)。

チャーリー・ブラウン：(お店の人に) そうです..
 ぼくの犬に新しいごはん皿がほしいんです..
 (お店の人にきかれて) 金属かプラスチックか? 赤いの? 黄色? 青? うーん、分からないなあ..
 (スヌーピーにむかって) 君はどんなごはん皿がいいの?

スヌーピー：中身がいっぱいなの!



図2 スヌーピーとチャーリー・ブラウンの会話
 資料出典：Schurz(1991)：26

ここでは、チャーリー・ブラウンが発した「君はどんなごはん皿がいいの?」という言葉の多義性を見て取ることができる。この言葉は、「お店で犬のごはん皿を買う」というコンテキストの中に置かれて初めて、ごはん皿の材質や色のことを意味していることが分かる。にもかかわらず、スヌーピーはチャーリー・ブラウンの言葉を別のコンテキストのもとへと置き換えてしまっており、それがマンガのオチになっている。

このように、あるコンテキストに置かれてはじめて意味が決まるという、言葉の多義的な性格が「インデックス性」なのである(図3)。

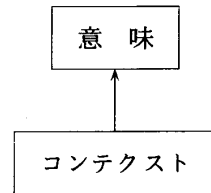


図3 インデックス性 indexicality
 資料出典：筆者作成

2) 「リフレキシビティ reflexivity」

以上で見たように、言葉が多義的であるにもかかわらず、「人々は日常なぜそれをいちいち確認しあわなくともツーカーで会話できるのか(お互い分かりあっていると了解できるのか)を解く概念」が、「リフレキシビティ」である。「つまり共通のリアリティ(現実感)のなかでそれについて語れば語るほどそのリアルさへの確信はどんどん増していく、という語りとリアリティの循環するフィードバック関係のこと」を、「リフレキシビティ」と呼ぶのである(山田・好井1991:9)。

この例についても、やはりシュルツのマンガ『ピーナッツ』で見よう。次のような会話を見てもらいたい⁵⁾。

ライナス：ねえヴァイオレット、いっしょに遊ばない?

ヴァイオレット：あんた、年下じゃない(といってドアをバタンと閉める)。

ライナス：(困惑して) ヴァイオレットったら、

いつもぼくの質問に答えてくれないんだから。

私たちマンガの読み手は、ヴァイオレットの発言が直前のライナスの質問（「いっしょに遊ばない？」）に対する答えとなっていると解釈する。そうすることで、＜子どもの世界では年下の子と一緒に遊ぶべきではない＞とする規範（とヴァイオレットが想定しているもの）をよりリアルに確信していくのである。そして、最後のライナスの発言（「ヴァイオレットったら、いつもぼくの質問に答えてくれないんだから」）によって、ライナスがこうした規範を知らないほど幼いことが明らかになり、私たちの笑いを誘うのである（西阪1992:39）。

つまり、これらの会話の中で、私たちは＜子どもの世界では、年下の子と遊ぶべきではない＞という規範を、より自明な社会的リアリティとして受け入れるようになるのである。このように、会話のなかの言葉や表情、しぐさや息づかいが、社会的リアリティをより自明なものとして構築する

夫：今日、ダナは抱き上げてやらなくてもパーキング・メーターにうまいこと1ペニー入れたよ。

妻：あなた、あの子をレコード店に連れていったの？

夫：そうじゃないよ。靴の修理屋に寄ったんだ。

妻：どうして？

こと、それが「リフレキシヴィティ」なのである（図4）。

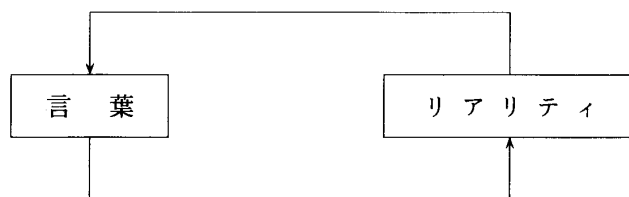


図4 リフレキシヴィティ reflexivity
資料出典：筆者作成

IV. いかにして人は「理解／誤解」するのか？

では、以上のようなエスノメソドロジーの概念装置を用いながら、＜いかにして人は「理解／誤解」するのか＞について考察してみよう。

その際まず、ガーフィンケルの分析において用いられた、ある夫婦の会話を見てもらいたい。この分析においては、実際に行われた会話の右横に、本人たちにそれぞれの発した言葉で何を

私の4才になる息子のダナは、以前はいつもパーキング・メーターの高さまで抱き上げてやらねばならなかった。でも、私が彼を幼稚園から連れ帰った今日の午後、車を駐車場に留めた時には、息子はメーターの高さに十分手が届き、上手に1ペニーを投入することができた。

息子がメーターに1ペニーを入れたのなら、あの子と一緒にいる時に、あなたは寄り道をしていたのだ。息子を連れて行く途中か、それともその帰り道のどちらかで、レコード店に立ち寄ったにちがいない。帰り道に寄ったのであの子はあなたと一緒にだったのか？それとも、迎えに行く途中でレコード店に立ち寄り、帰り道にはどこか別の所に寄ったのか？

いいや。僕は息子を迎えに行く途中でレコード店に立ち寄り、彼と一緒に家に帰る途中で靴の修理屋に寄ったんだ。

私は、靴の修理屋にあなたが立ち寄らねばならぬ理由を一つ知っている。でも、実際はなぜか？

夫：新しい靴ひもを何本か買ったんだ。

妻：あなたのローファーの運動靴、かかと新しくしなくちゃ。いたんでるわよ。

意味しようとしていたかを書いてもらっている (Garfinkel1964=1989: 37-38)。

この会話を見ると、夫婦は、多くの事柄をコンテキストとして、お互いの言葉を「理解」していることが分かるだろう。「インデックス性」の説明においても指摘しておいたように、私たちは、コミュニケーションにおいて他者を「理解」する際に、そのコンテキストを既にふまえていることが必要とされるのである。

だが、そのコンテキストを相手と共有しなければならないかという、決してそうではない。私たちはそれぞれ、異なるコンテキストのもとで相手の言葉を解釈することがあったとしても問題はないのである。たとえ異なるコンテキストのもとで他者の言葉を解釈し、そのことによって言葉の意味内容がすれ違うことになったとしても、私たちは、他者を「理解」することができるのである。

例えば、医師と患者の会話に関する、スキナー (Thelma-Jean Skinner) の次のような分析を見てもらいたい (Leiter1980=1987: 203-206)。

医師：どれくらいベネドリルを飲まなければならないの？

患者：うーん、ほんのちょっと、金曜と土曜には少し飲みます。昨日は全然飲みませんでした。昨日も今日も吐き気はなかったので、今日は飲みませんでした。

このような会話が行われた後で、スキナーは医師と患者にインタビューし、おのおのに自分の言ったことについて何を意味したかということと、相手が何を意味しようとしたかということ述べるように求めている。

僕の茶色のオックスフォードの片方のひもが切れているのを知っているだろう？だから、何本か新しいひもを買うために寄ったんだ。

私が考えていたのは、あなたの買った物とは別のことだ。いたんでいるから、かかとを直さねばならない黒のローファーをもっていくことができたのに。すぐにでもそれを直した方がいい。

面接者：医師が、どのくらいのベネドリルを飲んだかをたずねたとき、どうでしたか？なんのためにそんなことをたずねているのだと思いましたか？

患者：うーん、たぶん、その薬をちょっとでも飲んだかどうかを知るためでしょう。多くの人は、私も時々そうですが、医師が薬をくれているのに、飲まないで、家に持って帰って引き出しに投げ込んで、そうしたのが最後引き出しを掃除するまでお目にかかることもなく、そして捨ててしまうのです。

医師：何人かの者は、元気です、大丈夫ですと言います。ところが実際は、症状をおさえるためには、薬をできるだけ頻繁に飲まなければならないのです。…あの患者はベネドリルを数日間飲んでいないと言うので、私は、彼女は元気なのだと推察しました。

以上では、患者は「自分が薬を捨てないでちゃんと飲んでいるか知るために、医師は質問してきたのだ」というコンテキストのもとで会話し、医師は「薬を飲んでいるときには患者は元気だと答えるが、実は元気ではないのだ」というコンテキストのもとで会話している。そのため医師と患者それぞれは、言葉の意味内容においてすれ違っている。

だが、それにもかかわらず、医師と患者はそれぞれ、相手を「理解」できたし、相手に「理解」してもらったと報告しているのである。ではこのように、異なるコンテキストのもとで意味内容がすれ違っているにもかかわらず、いかにして人は他者を「理解」していると言えるのだろうか。

それは、「自分と他者が互いに理解し合っているのだ」という感覚を、他者との関係の中で構築することによってである。つまり、「この人とはお互いに理解し合っているのだ」という感覚を「社会的リアリティ」として構築し、〈共に理解し合っている仲間〉という意味での「理解の共同体」を形成しながら、私たちは他者を「理解」していると言えるのだ。

私たちが他者を「理解」と言う場合、他者と意味内容においてすれ違っているかどうかは付随的な問題である。他者を「理解」する場合に最も本質的なことは、その人が「理解の共同体」のメンバーであるかどうかということなのだ。その人が「理解の共同体」のメンバーである限り、その人と意味内容においてすれ違いがあるかどうかに関わらず、私たちは会話を交わせば交わすほど、「リフレキシビリティ」の作用を通じて「お互いが理解し合っている」という感覚を、より自明な「社会的リアリティ」として受け取るようになっていくのである。

さらに、私たちが他者に対して「誤解」という言葉を投げかけるのは、逆に、こうした「社会的リアリティ」を他者に対して構築していない場合である。つまり、コミュニケーションの相手が、自分にとっての「理解の共同体」のメンバーではない場合である。コミュニケーションの相手が、いくら気持ちを伝えようとしたとしても、その人を「理解の共同体」のメンバーと見なしていない場合には、その人を「理解できた」と受け取ることはない。

このように、私たちはコミュニケーションのプロセスの中で、絶えず「お互いが理解し合っている」という感覚を「社会的リアリティ」として構

築し、「理解の共同体」を形成しながら、コミュニケーションの相手を「理解」したり、「誤解」したりしていると言うことができる。

おわりに

以上見てきたように、私たちが他者を「理解」する場合には、コミュニケーションにおいて気持ちが正確に伝わっているかどうかは問題ではない。そうではなく、私たち自身が他者との関係の中で、「この人とは理解し合っているのだ」という感覚を自明な「社会的リアリティ」として構築しているかどうか、したがって他者が自分にとっての「理解の共同体」のメンバーであるかどうか、問題なのである⁶⁾。

それゆえ、いくら他者があるがままの心で気持ちを伝えようとしたとしても、「この人とは理解し合っているのだ」という感覚を「社会的リアリティ」として構築していない場合には、私たちは相手を「理解」することはできないだろう。

こうした感覚は、他者に対する単なる「先入観」なのかもしれない。だが、私たちは、そうした「先入観」を持たずに他者と関わることはできない。このような意味で、私たちのコミュニケーションには、多くの困難が横たわっていると言えるだろう。

だが同時に、このような困難が横たわっているにも関わらず、私たちは他者と関わり続けるのをやめようとしめないのも事実である。結局、このような困難に一つ一つ向き合いながら、コミュニケーションをあきらめないことだけが、私たちに残された道ではないだろうか。

(注)

- 1) この論考を筆者が著したのは、主として以下2つの事柄が動機となっている。
 - (1) 阪神・淡路大震災時に筆者は西宮に居住しており被災した。その折、幾人かの人々とふれあい、その中で彼らを「理解／誤解」し、また彼らから「理解／誤解」されたりもした。そのことを筆者自身の専

門領域である社会学において考えていくこと、それが阪神・淡路大震災に対する自分の想いを少しずつ少しずつ対象化していくことであり、自己の学問を生きた学問とすることだと思っている。

- (2) 筆者は社会学でデータ解析を行う必要性から、コンピュータ科学と関わってきた。そのため「インター

ネット社会論」や「ネットワーク社会論」についても関心を持っている。だが「インターネット社会論」や「ネットワーク社会論」の中には、コンピュータ・ネットワークそのものが、人間間のコミュニケーションの可能性を高めるのだという、かなり楽観的な予測を行っているものもある。確かに筆者も、現在のコンピュータ・ネットワークが、人間のコミュニケーションの可能性を高める上で、その「支援ツール」を提供しはじめていると考えている。だが、それは、あくまで「ツール」に過ぎないのであり、その「ツール」を用いてコミュニケーションの可能性を実際に高めるのは人間である。その場合には、コミュニケーションには多くの可能性と同時に、越えがたいハードルもあるということを確認しておく必要がある。本稿では、その主張の一つの根拠を示したつもりである。

2) 筆者は、情報技術を大きく「情報処理技術」と

「情報通信技術」に分けている(図5)。「情報処理技術」とは具体的に言えば、①テキスト処理(ワードプロセッシングや翻訳)、②グラフ処理、③データ処理(統計解析)、④モデル処理(OR:オペレーションズ・リサーチ)、⑤数式処理、⑥論理処理(AI)などの領域で用いられるハードウェア技術およびソフトウェア技術のことである(新村1993:63)。

それに対して、「情報通信技術」とは、機械=機械間で情報のやりとりを可能とする技術のことである。この技術は、今日コンピュータ・ネットワークなど、人間のコミュニケーションを支援するツールとして発展しはじめるにいたっている。

シャノンのモデルは、この機械=機械間の通信技術を対象としたものであって、人間間のコミュニケーションそのものまでを対象としたものではないことに注意するべきである。にもかかわらず、人間間のコミュニケーションにまで、シャノンのモデルを応用しようとすることは危険だと筆者は考えている。

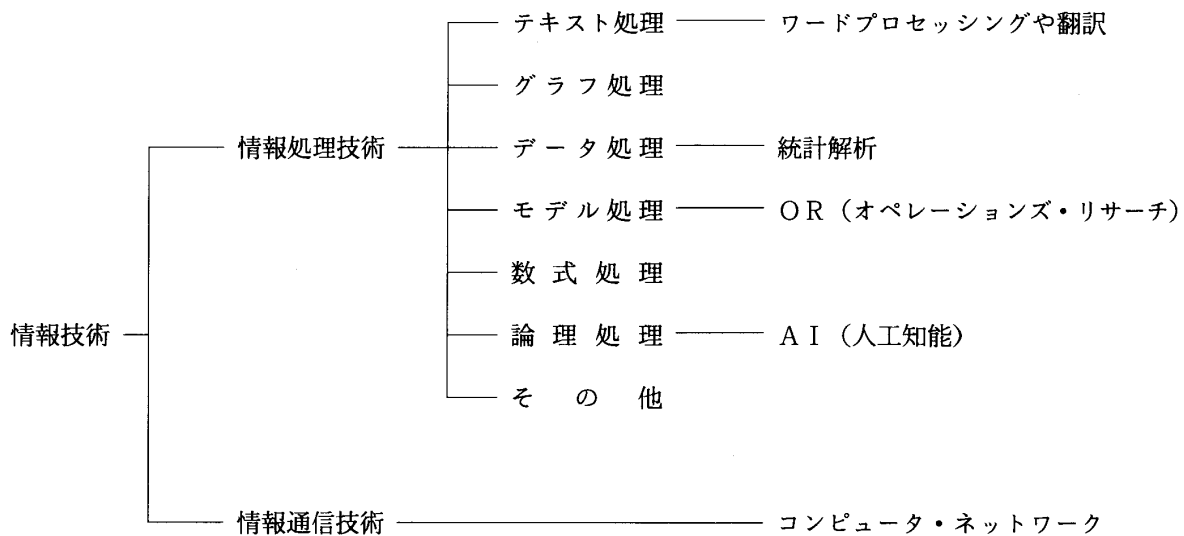


図5 情報技術の分類

資料出典：新村(1993)を参考に筆者作成

3) この社会学的研究スタイルは、多くの学問分野から影響を受けている。例えば、社会学の分野では、先にあげたシュッツの現象学的社会学があげられるだろう。また言語学の分野では、ルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein)やノアム・チョムスキー(Noam Chomsky)の言語学な

どがあげられる。

4) また、この社会学的研究スタイルの成果の多くは、「コミュニケーション学」「スピーチ・コミュニケーション学」といった学問分野とも関係が深い。これらは、「情報学」とともに近年アメリカで大きく取りあげられるようになっている学問分野である。

例えば、「スピーチ・コミュニケーション学」の主要学会誌である『Quarterly Journal of Speech』などにも、エスノメソドロジー関係の幾つかの論文が掲載されている(高山1987:340)。

このことからエスノメソドロジーの研究スタイルが、組織コミュニケーションや異文化コミュニケーションなどの研究にも寄与しうる可能性があるということが推察できるだろう。

5) これは、社会言語学者ラボフ(W. Labov)が探し出してきた例である(西阪1992:39および44)。

6) では、「お互い理解し合えている」といった感覚は、いかにして形成されるのだろうか。このことを考察することが、残された課題である。それゆえ今後は、具体的な「会話データ」を採り、「理解」と「誤解」に関する詳細な「会話分析」を行っていくつもりである。

参考文献

- Berger, P.L., & Luckman, T. (1966). *The Social Construction of Reality*. USA: Anchor Books. 山口節郎訳(1977)『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法—』新曜社
- Blumer, H. (1969). *Symbolic Interactionism*. USA: Prentice-Hall. 後藤将之訳(1991)『シンボリック相互作用論』勁草書房
- Cicourel, A.V. (1964). *Method and Measurement in Sociology*. USA: Free Press. 下田直春監訳(1981)『社会学の方法と測定』新泉社
- 遠藤英樹(1994)「作業組織の小集団活動への『意味世界からのアプローチ』—文献レビューによる概念枠組みについての覚え書—」『関西学院大学社会学部紀要』第71号、135-142
- 遠藤英樹(1995)「石けん運動における諸組織団体に関する考察—それぞれの社会的世界、それぞれの石けん運動—」『奈良県立商科大学研究季報』6(1)、59-66
- Garfinkel, H. (1960). *The Rational Properties of Scientific and Common Sense Activities*. *Behavioral Science*, 5(1), 72-82.
- Garfinkel, H. (1964). *Studies of the Routine Grounds of Everyday Life*. *Social Problems*, 11(3), 225-250. 北澤裕・西阪仰訳(1989)「日常活動の基盤—当たり前を見る—」『日常生活の解剖学—知と会話—』(pp.31-92).マルジュ社
- Garfinkel, H. (1974). *The Origin of the Term "Ethnomethodology"*. In Roy Turner (Ed.), *Ethnomethodology* (pp.15-18). USA: Penguin 山田富明・好井裕明・山崎敬一訳(1987)「エスノメソドロジー命名の由来」『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体—』(pp.9-18).せりか書房
- Goffman, E. (1959). *The Presentation of Self in Everyday Life*. USA: Doubleday & Company Inc. 石黒毅訳(1974)『行為と演技—日常生活における自己呈示—』東京:誠信書房
- Goffman, E. (1974). *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. USA: Northeastern University Press.
- 橋爪大三郎(1985)『言語ゲームと社会理論—ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン—』東京:勁草書房
- 伊藤守・小林直毅(1995)『情報社会とコミュニケーション』東京:福村出版
- 片桐雅隆(1989)『意味と日常世界—シンボリック・インタラクショニズムの社会学—』東京:世界思想社
- 片桐雅隆(1991)『変容する日常世界—私化現象の社会学—』東京:世界思想社
- 片桐雅隆(1996)『プライバシーの社会学—相互行為・自己・プライバシー—』東京:世界思想社
- Leiter, K. (1980). *A Primer on Ethnomethodology*. USA: Oxford University Press. 高山真知子訳(1987)『エスノメソドロジーとは何か』新曜社
- 村井純(1995)『インターネット宣言』東京:講談社
- 村井純(1995)『インターネット』東京:岩波新書
- 永井均(1995)『ウィトゲンシュタイン入門』東京:ちくま新書

- 西垣通 (1988) 『A I -人工知能のコンセプト-』 東京：講談社現代新書
- 西垣通 (1991) 『デジタル・ナルシス-情報科学パイオニアたちの欲望-』 東京：岩波書店
- 西阪仰 (1992) 「エスノメソドロジストは、どういうわけで会話分析を行うようになったか」 好井裕明 (編) 『エスノメソドロジ-の現実-せめぎあう<生>と<常>-』 (pp.23-45) 東京：世界思想社
- 西阪仰 (1995) 「心の透明性と不透明性-相互行為分析の射程-」 『社会学評論』 46(2)、128-143
- 大澤真幸 (1994) 『意味と他者性』 東京：勁草書房
- Psathas, G. (1988). *Ethnomethodology as a New Development in the Social Sciences. Lecture presented to the Faculty Waseda University, Tokyo.* 北澤裕・西阪仰訳 (1989) 「序論 エスノメソドロジ-社会科学における新たな展開-」 『日常生活の解剖学-知と会話-』 (pp.5-30).マルジュ社
- Rogers, E.M. (1986). *Communication Technology.* USA: Free Press. 安田寿明訳 (1992) 『コミュニケーションの科学-マルチメディア社会の基礎理論-』 共立出版
- Sacks, H. (1979). *Hotrodder:A Revolutionary Category.* In G. Psathas (Ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology* (pp.23-53). USA: Irvington Publisher 山田富明・好井裕明・山崎敬一訳 (1987) 「ホットロッダー-革命的カテゴリー-」 『エスノメソドロジ-社会学的思考の解体-』 (pp.19-37).せりか書房
- 桜井厚 (1992) 「会話における語りの位相-会話分析からライフストーリーへ-」 好井裕明 (編) 『エスノメソドロジ-の現実-せめぎあう<生>と<常>-』 (pp.46-68) 東京：世界思想社
- Schurz, C.M. (1991). *PEANUTS.* USA: United Feature Syndicate, Inc. 谷川俊太郎訳・河合隼雄解説 (1995) 『SNOOPYのもっと気楽に-①なるようになるさ-』 講談社+α文庫
- Schüz, A. (1932). *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt--Eine Einleitung in die verstehende Soziologie--.* Wien: Springer-Verl. 佐藤嘉一訳 (1992) 『社会的世界の意味構成-ヴェーバー社会学の現象学的分析-』 木鐸社
- Schüz, A. (1970). *On Phenomenology and Social Relations (Edited by Helmut R. Wagner).* USA: The University of Chicago Press. 森川真規夫・浜日出夫訳 (1980) 『現象学的社会学』 紀伊国屋書店
- Shibutani, T. (1976). *Reference Groups as Perspectives.* *American Journal of Sociology*, 81(5), 562-569.
- 新村秀一 (1993) 『意思決定支援システムの鍵-有り余るコンピュータ・パワーをどう使う-』 東京：講談社ブルーバックス
- Skinner, Thelma-Jean. (1975). *The Processes of Understanding in Doctor-Patient Interaction.* Unpublished Ph.D. dissertation, Rice University, Houston.
- 竹田青嗣 (1989) 『現象学入門』 東京：日本放送出版協会
- 山田富明・好井裕明 (1991) 『排除と差別のエスノメソドロジ-』 東京：新曜社
- Wieder, L. (1974). *Telling the Code.* In Roy Turner (Ed.), *Ethnomethodology* (pp.144-172). USA: Penguin 山田富明・好井裕明・山崎敬一訳 (1987) 「受刑者コード-逸脱コードを説明するもの-」 『エスノメソドロジ-社会学的思考の解体-』 (pp.155-214).せりか書房